藤女子大学人間生活学部紀要，第 52 号：13-28．平成 27 年．
The Bulletin of the Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University, No. 52: 13-28. 2015.

理系は非宗教的か？

── JGSS-2002 の分析 ──

寺　沢　重　法

Are Respondents Majoring in Natural Science Non-Religious?

Analyses of JGSS-2002

Shigenori TERAZAWA

Abstract

Objective: To examine whether respondents majoring in natural science (rikei) in higher education(under graduate and graduate university) are non-religious. Methods: Data from the 2008 Japanese General Social Surveys (JGSS-2008) is analyzed. Dependent variables are 1) religious affiliation, 2) devotion, and 3) confidence in religious organizations. Independent variable is whether respondents majoring in natural science (rikei) or human-social science (bunkei) in higher education. After cross-tabulation analyses, multinominal logit analyses and ordered logit analyses are conducted with the net effects of various socio-demographic and educational variables. Results: Respondents majoring in natural science are not significantly less religious than those who majored in human-social science in higher education, even though controlling various control variables. Conclusions: The widely accepted idea that those who majored in natural science in higher education are non-religious is partially rejected.

1．はじめに

本稿の課題は､「理系出身者は文系出身者に比べて非宗教的なのか？」というリサーチクエスチョンに、全国規模のサンプリングデータの分析から答えることである。

近年の日本で事件を起こした宗教団体には、事件に深く関わった信者の中に理系出身者の信者がいた場合がある。代表的なのはオウム真理教である。実行判決を受けた教団幹部の中には、医師、エンジニアなどの少なからぬ理系の学部出身者が含まれている（櫻井 2006)。他にも近年では 2007 年から始まったヒーリングサロン「神世界」をめぐる一連の神世界事件において、国立大学の自然科学系の教員が関与していたことも大きく取り上げられた（櫻井 2009)。

このように、特に事件となった宗教団体の活動に理系出身者の信者が含まれていることが明らかになった際にしばしば生じるのは､「なぜ理系出身者が？」という疑念である。たとえばジャーナリストの北畠清泰氏から宗教学者の井上順孝・武田道生両氏への質問として「オウム真理教には多くの若者が入信している。しかも理工系の優秀な学生が多いと言われている。どうして、自然科学を学んだ若者が多く入ってくるのだろうか」(井上・他編 1995：24）とうものがある。また「地下鉄サ

所属：
北海道大学大学院文学研究科
Graduate School of Letters, Hokkaido University

リン事件の後、報道記者たちから聞かれたのは「最高学府を出た理系のエリートがなぜ、非理性的に見えるオーム真理教に名をつらねているのか」という質問であった」（安斎・村尾 200：５）という発言もある。

また評論家・メディア社会論研究者の武田徹は2011年にオウム真理教の元幹部・遠藤誠一被告の最高裁上告が退けられて死刑が確定し、オウム真理教関連事件の裁判が全て終結したことをきっかけとしたオウム事件の論説において、「オウムは理系エリート集団とよく言われたが、一連の事件の担い手になっていったのもまた理系エリートであったことは何を意味するのか。」（武田 2011）と述べている。

もちろん議題はオウム真理教という「特殊な」新宗教団体についてのものであり、必ずしも宗教一般を論じているわけではない。しかしこれらの疑念からうかがえるのは、「自然科学を学んだ人、理系出身者は宗教に関心をもったり、宗教性が高いはずがない」という前提、さらに言えば「宗教と自然科学は相いれないもの、対立するものであり、自然科学を学んだ人、理系出身者は、その相対立する相手である宗教と親和性をもつはずがない」という前提であると思われる。

確かに宗教と自然科学はしばしば対立してきた歴史がある。古くはヨーロッパにおける天動説と地動説の対立、ガリレオの宗教裁判が代表的である。現代も特にアメリカでダーウィンの進化論を支持する立場と、聖書の記載通りに世界が創造されたことを主張する創造説を支持する立場とがしばしば対立する。進化論／創造説の対立については、特に公立学校の理科科目において進化論を教えることの是非をめぐって対立が生じ、裁判になる場合もある（鵜浦 1998）。

一方で、日本では、宗教と科学は必ずしも対立的ではないことも指摘されている。先の北畠による質問に対して井上・武田は、日本において宗教と科学はそれほど対立した歴史がないことを指摘しつつ、以下のような回答をしている（一部抜粋）。

> 日本に大きな影響を与えた仏教の場合、たとえば、極楽はどこにあるのかとか、輪廻転生とか世界の始まりに関する説明とかには、必ずしも科学的理論と合致しないものがあるものの、あまり批判を浴びることはない。〈中略〉新宗教の場合は、科学と対立しないのみならず、宗教の教義は科学と合致する、あるいは、科学をも包摂するというような主張をすることが多い。〈中略〉そうした文化的土壌があるので、日本において、宗教と自然科学は相いれないとは考えられていない（井上・他編 1995：24-26）。

だがこうした指摘がある一方で、先述したような「理系＝非宗教的」という前提がある種の社会通念として広く一般的に流布していると思われる。そして、こうした社会通念があるがゆえに、オウム真理教のような「特異」な宗教団体であったとしても、そこに理系出身の信者がいることをもって「なぜ理系の人が？」という違和感がもたれたのではないかと推察される。

それでは理系出身者は本当に非宗教的なのだろうか。残念ながらこうした社会通念の妥当性を経験的データから検証した研究は、日本においてはほぼ皆無である。そこで本稿では、「理系出身者は文系出身者に比べて非宗教的なのか？」というリサーチクエスチョンに、全国規模のサンプリングデータの分析から答えることを課題とする。

本稿の構成としては、まず第２章で自然科学を含む学問領域と宗教性に関する実証研究の知見、ならびに日本における先行研究を俯瞰し、その問題点と本稿の特色を述べる。第３章では本稿で使用するデータと変数、分析方法を説明し、第４章では分析結果を提示する。最後に第５章で要約と議論を行う。

２．先行研究の整理

2.1　欧米の先行研究（実証分析）

欧米ではガリレオの宗教裁判に代表されるように宗教と科学の対立の歴史は古く、宗教と科学の関係をめぐる認識論的・思想的研究が長らく蓄積されている。

一方、実証的な宗教社会学においては世俗化論の影響を受けながら宗教と科学に関する研究が行われてきた。世俗化論においては、近代科学・科学的知識というものが、個人の宗教性を低める要因として議論されてきた（たとえば学歴の高い人は低い人よりも教会出席頻度が低いなど）（Evans and Evans 2008)。

こうした議論の流れを受けて、特にアメリカで長く蓄積されてきたのは、研究者を対象とした宗教性の実証研究である。高等教育は、個人の世俗化を推進する強力なエージェントであり、その高等教育の担い手である研究者においてこそ宗教と科学の対立が明確に表れていると想定されてきたためである（Evans and Evans 2008)。

研究者を対象とした宗教性の実証研究では、たとえば「研究者はどの程度宗教的なのか？」「自然科学・社会科学・人文科学などの学問領域によって宗教性は異なるのではないか？」「自然科学者は人文科学者や社会科学者と比較した場合、最も非宗教的ではないのか？」といった問いが検討されている（Evans and Evans 2008)。

こうした研究の嚆矢は 1910 年代から 1930 年代にかけて実施された社会心理学者の Leuba の研究である。Leuba（1912、1916、1932）によると、研究者は非研究者よりも非宗教的な傾向があり、また研究者の中では、自然科学者が人文・社会科学者よりも非宗教的であることが明らかにされている。

一方で、その後の研究では、むしろ社会科学者の方が自然科学者よりも非宗教的であることも指摘されている（Lehman and Shriver 1968; Thalheimer 1973; Wuthnow 1989)。

さらに近年の研究では、学問領域の違いによる研究者の宗教性の差はほとんどみられず、むしろ研究者の社会経済的地位や宗教的社会化（親の宗教性）の影響力の方が相対的に顕著であること（Echklund and Scheitle 2007; Ecklund and Park 2009; Gross and Simmons 2009）も指摘されている。

たとえば、Ecklund and Schieitle（2007）は大学教員を対象に行った Religion Among Academic Scientists（RAAS）というデータの分析の結果、「自然科学／社会科学」の違いは、宗教性の違い（宗教に真実があると考える／神を信じる／教会出席頻度）に対して大きな関連をもっておらず（物理学に比べて化学＆政治学が若干宗教的)、むしろ年齢、婚姻状況、子どもの有無、子どもの時の家庭の宗教などの方が研究者の宗教性に対して大きな影響力をもっていることを指摘している。

Gross and Simmons（2009）は大学教員を対象に行った Politics of the American Professionale Study というデータの分析から、学問領域（社会科学／人文科学／自然科学）の違いは、「聖書の意味」「信仰度」「神を信じること」「教会出席頻度」「スピリチュアリティ」のいずれの従属変数に対しても有意な関連を持っていないことを明らかにしている。

また学問領域間の宗教性の差は時代とともに縮小しつつあることも指摘される。たとえば Ecklund et al.（2008）は上述した RAAS の分析から、「自然科学／社会科学」というカテゴリーによる教会出席頻度の違いを 1969 年と 2005 年で比べると、約 35 年間で自然科学の方が社会科学よりも教会出席頻度が高いという傾向は変わらないが、その差は縮小していることを指摘している[1]。

以上の知見を総合的に見ると、今日のアメリカにおいては自然科学者が特段非宗教的というわけではないこと、また学問領域間の宗教性の差はあまり目立たない傾向にあることがうかがわれる。このことは自然科学者であることは非宗教的であることとは必ずしも結びついていない可能性、さらには個人のレベルで見た場合、自然科学と宗教は必ずしも対立的ではない可能性を示唆するものである[2]。

こうした知見を踏まえれば、日本における「理系＝非宗教的」という社会通念は必ずしも経験的妥当性が無い可能性があり、検討の余地が十分にある社会通念であると思われる。

2.2　日本における実証研究

日本における「宗教と自然科学」の関係を直接的に扱った研究成果としては、1992 年から 1996 年にかけて刊行された『岩波講座　宗教と科学』（全 10 巻＋別冊 2 巻）が挙げられる。第 1 巻『宗教と科学の対話』、第 2 巻『歴史のなかの宗教と科学』、第 3 巻『科学時代の神々』、第 4 巻『宗教と自然科学』、第 5 巻『宗教と社会科学』、第 6 巻『生命と科学』、第 7 巻『死の科学と宗教』、第 8 巻『身体・宗教・性』、第 9 巻『新しいコスモロジー』、第 10 巻『人間の生き方』、別巻 1 『「宗教と科学」基礎文献―日本篇』、別巻 2 「「宗教と科学」基礎文献―外国編」である。いずれの巻本も宗教と科学をめぐる様々な論考が掲載されている。

特に自然科学との関係に焦点を当てたのが、第 4 巻の『宗教と自然科学』である。目次は以下のとおりである。「序論　科学の体系と宗教」（中村

雄二郎)、「第1章　真理・ニヒリズム・主体」(木村敏)、「第2章　弁証法神学と科学」(小川圭治)、「第3章　時間と空間の人間的意味」(戸田盛和)、「第4章　科学者の宗教心」(泉美治)、「第5章　アニミズムと科学」(鶴見和子)、「第6章　ピュシスとテクネー」(種山恭子)、「第7章　自然哲学と魔術の知」(村上陽一郎)、「第8章　実証主義とその限界」(小田稔)、「第9章　現代宇宙論と宗教」(田中裕)、「第10章　情報化社会と宗教」(坂井利之)。内容は、宗教と自然科学の関係についての哲学的・思想的論考である。重厚な論考だが、一方で、本稿のテーマである自然科学を学んだ人たちの宗教性は、人文社会科学を学んだ人たちと比較してどのようなものなのか、といったことについては論じられていない。

一方で、やや一般向けの書籍や論説などにおいては、「自然科学を学んだ理系の人の方が宗教的である」というような、ある種の仮説が提示される場合がある。たとえば以下のような説明である。

> 宗教と自然科学が無縁であるとか、自然科学を学ぶ者は宗教に関心をもたないのではないか、という前提は、捨てなければならないということである。これはむしろ思い込みに近い。〈中略〉自然科学を学んだ者が、宇宙の法則や自然界のリズムなどに神秘性を感じるのもよくあることである。それが特定の宗教への入信につながるわけではないが、そうした潜在的可能性をもっていることは言える。〈中略〉こうしたことからも、極論を言えば、自然科学者こそ科学の限界を感じ取ることができる立場にいると言えよう(井上・他編 1995:24-26)。

> 長じて社会の成り立ちを知れば知るほど彼らは技術解決主義の限界を感じたのではないか。現実社会は科学者や技術者がその能力をフルに発揮できる場所ではなかった。経済的事情や様々な社会制度が彼らの活躍を阻む。〈中略〉彼らが空中浮遊など超自然現象の実現可能性を謳い上げるオウム真理教に惹かれた心情には、そうした科学の消極的傾向への反発、即ち従来科学のカラを破りたいという願望があったのではないか。〈中略〉その意味では科学こそが彼らを信仰に導いたのだ(武田 2011)。

これらでは、自然科学を学ぶことで宇宙の法則や自然界のリズムに神秘性を感じている、科学の限界や従来の科学の殻を破りたいと感じるようになることで、宗教への入信の潜在的可能性をもったり、宗教への関心をもったりする、という説明がなされている。こうした説明からは「理系出身者の方が文系出身者よりも宗教的である」という予測が立てられる[3)]。

それでは日本における学問分野と宗教性に関する実証研究の知見はどのようなものだろうか。アメリカにおいては、先述したような重厚な実証研究の蓄積がある一方、日本における実証研究は、管見の限り、水野・辻(1996)のみである。

水野・辻(1996)は1995年7月、理系大学1校および関東圏7大学の大学生に対してオカルトに関する調査を行い、理系/文系の違いと宗教性の関連を検討している。その結果、以下の知見が得られている。1)「霊魂の存在」「星占い」「手相」「霊による金縛り」は文系学生の方が信じる有意な傾向がある。2)「ヨガ」「霊視」「臨死体験」は文系の方が体験したいと回答する傾向がある(ヨガのみ有意差あり)。3)「キリスト教」「仏教」「神道」「新宗教」「新新宗教」「チベット密教」のいずれも文系学生の方が関心をもつ有意な傾向がある。4)「終末観・運命観」因子は文系の方が有意に得点が高い。5)「UFOの存在」は理系の方が文系より信じる傾向が若干高いが有意差はない。6)「修行による空中浮揚」「あらかじめ定められた運命」「コックリさん」は理系の方が、肯定率が高い(有意かどうかは不明)。

これらの結果から、おおむね文系学生の方がこれらのオカルト意識が高い傾向にあるが、理系/文系で有意差が見られなかったものや、有意差は見られないものの理系学生の方がむしろ信じたり関心をもったりする傾向にあるものも見いだされる。理系であるからといってすべての面において宗教(オカルト)に否定的であるわけではないとしている。

水野・辻(1996)は貴重な実証研究だがいくつか限界もある。第1に対象が大学生に限定されている。もちろん学校教育において理系と文系に分岐するのは主に大学であり大学生を対象とすることに問題があるわけではない。しかし理系と文系

の違いは大卒以降も職業などにおいて影響力をもつ可能性がある。そのため大学生のみならず大卒者も分析対象にする必要があると思われる。

第2に理系／文系の違いと各宗教性の単相関分析にとどまっている。しかしおそらく両者の間には年齢や性別、出身階層の違いなどが関連していると思われる。また大卒者をサンプルに含める場合、大学での専攻の違いのみならず卒業後の職業の違いも関連していると思われる。こうした諸要因を統制したした上で理系／文系の違いが宗教性にどのように関連しているのかを見極める必要がある。

第3に都内の大学生を任意に抽出したものでありサンプルの代表性に欠けている。日本全国の幅広い層の人々を対象としたサンプリングデータを用いて全国的な傾向を把握しておく必要がある。しかしながら、先述したアメリカの豊富な研究成果とは異なり、日本ではこうした点を考慮した実証研究がまだ行われていない。

本稿は、こうした日本における実証的先行研究の限界を、特に方法論的な点でいくばくか埋めることを目的としたものである。

また先述したように「学問分野と宗教性」をテーマとする実証研究はキリスト教文化圏であるアメリカを対象としたものに限られている。その一方で、非キリスト教文化圏や非欧米地域を対象に「学問分野と宗教性」を論じた実証研究は極めて不足している。本稿は日本という、非キリスト教文化圏・東アジア地域に属する地域を分析対象とすることによって、これまでの実証研究の空白部分を埋めようとするものでもある。

2.3 非教団所属者を除いたサンプルと含めたサンプル

日本では宗教団体に所属せずとも、何らかの宗教行為を行ったり宗教的価値観をもつ人が少なくない。そのため宗教団体所属者を含めたサンプルと除外したサンプルでは、異なる分析結果が出る場合がある（三谷 2014；Sakurai and Terazawa 2012）。そこで本稿でも、キリスト教信者と新宗教信者という宗教団体所属者を除いたサンプルとそれらを含めた全体サンプルの両方の分析結果を確認する。

3．データ

本稿では、2002 年に実施された日本版 General Social Surveys（以下 JGSS-2002）を使用する。JGSS-2002 は全国の 20〜89 歳の男女を対象に、層化二段無作為抽出法で調査を行ったものである。JGSS は現時点で 8 回分の調査データが 2 次データとして利用可能である。そのうち大学の専攻分野を尋ねた設問が含まれているのは JGSS-2002 のみである。宗教に関連する設問も同時に含まれているため本稿の課題に適したデータであると判断される。

もっとも以下の分析で述べるように、先行研究に比べて JGSS-2002 は宗教に関する設問が非常に限られているため、オカルトなども含めた多面的な宗教性を検討できないという大きな弱点がある。しかしながら理系／文系と宗教の関連が分析可能な代表性の高いサンプリングデータであるというメリットをいかすことにしたい。

分析対象サンプルについて、まず本稿のテーマは理系／文系と宗教性の関連にあるため、理系／文系が専攻として明確に分かれる大学および大学院在学経験者（卒業者＋中退者＋在学者）を分析対象とする。また日本においては明確な宗教団体・集団（制度的宗教）に属す人は少なく、むしろ所属せずに様々な宗教実践・意識をもつ人が少なくない（非制度的宗教）。そして非制度的宗教実施者のみのサンプルと全体サンプルとでは、宗教性とボランティア活動の関連が変わるという結果も報告されている（三谷 2014）。そこで本稿でも、全体サンプルの分析に加え、日本における制度的宗教ともいえるキリスト教と新宗教を除外したサンプルの分析の両方を行う。

3.1 従属変数

１つ目は「宗教属性」である。質問文は「信仰している宗教はありますか」であり、選択肢は「１ある」「２特に信仰していないが、家の宗教はある」「３ない」である。この３つの選択肢は必ずしも順序尺度であるとは限らないため、名義尺度として扱うことにする。

２つ目は「信仰度」である。上記の設問で「１ある」もしくは「２特に信仰していないが、家の宗教はある」を選択した回答者には付問として「あなたは、自分が熱心な信者だと思いますか。」と尋

ねている。選択肢は「１熱心である」「２まあまあ熱心である」「３そんなに熱心でない」である。「信仰有無」の選択肢の「３ない」と合わせ、１が「ない」、４が「熱心である」となるように値をリコードした。

３つ目は「宗教団体への信頼」である。設問は「次にあげるＡ～Ｏについて、あなたはどれくらい信頼していますか」であり、本稿では「Ｂ宗教団体」への信頼度を用いる。選択肢は「１とても信頼している」「２少しは信頼している」「３ほとんど信頼していない」「４わからない」である。分析では「１とても信頼している」と「２少しは信頼している」は回答数が少ないため合体させて「信頼」とし「ほとんど不信」（ほとんど信頼していない）「わからない」の３つのカテゴリーから成る名義尺度とする。

3.2　独立変数

独立変数は「理系／文系」である。「理系」は「理工（理学・工学・農学）」と「保健（医学・歯学・薬学）」）から構成され、「文系」は「社会科学（経済学・経営学・商学・法学・政治学・社会学）」「人文科学（文学・外国語・哲学・歴史学・心理学）」「教育」「家政」「芸術」から構成される。分析では「理系」が１「文系」が０となるようダミー変数化した。「その他」「わからない」「非該当」「無回答」は欠損値処理をした。

なお単に理系／文系とするのではなく、社会科学系、人文科学系、医歯薬系といった細かな分類も可能である。しかし一般的な議論で理系の宗教性に言及される際には、細かな専攻ごとの違いではなく、理系／文系という二分法に基づいた議論がされることも少なくない。そのため「理系の人は非宗教的である」という通説の妥当性の吟味を目的とした本稿にあっては、敢えてこの二分法を使用することに意味があると思われる。

3.3　統制変数

いくつかの統制変数を使用する。まず回答者本人の社会―人口学的属性に関わる変数として、「実年齢」「性別」（女性＝1）」「居住地域」（町村＝1）「配偶状況」（「既婚・有配偶」（＝基準カテゴリー）「既婚・離死」「未婚」（「無回答」＝欠損値）「本人現職」（「専門・管理」（＝基準カテゴリー）「事務・販売」「ブルーカラー」「農林漁業」「無業」）「世帯年収」（「0－349万円」「350－649万円」（＝基準カテゴリー）「650－999万円」「1000万円以上」「DK・NA・回答拒否」）を統制する。

次に回答者の出身階層に関わる変数として「父教育年数」（旧制尋常小学校（国民学校を含む）＝6、旧制高等小学校＝8、旧制中学校・高等女学校＝11、旧制実業学校＝11、旧制師範学校＝11、旧制高校・旧制専門学校・高等師範学校＝14、旧制大学・旧制大学院＝17、新制中学校＝9、新制高校＝12、新制短大・高専＝14、新制大学＝16、新制大学院＝18）「父職業」（「父専門・管理」「父事務・販売」「父ブルーカラー」（＝基準カテゴリー）「父農林漁業」「父無業」）を統制する。出身階層は本人の学歴にも影響するため重要である。

さらに回答者の大学の種別や過去の成績に関して以下の変数も統制する。「国公私立」（「国立」「公立」「私立」（＝基準カテゴリー））、「卒業・在学状況」（「卒業」（基準カテゴリー）「中退」「在学中」「無回答＝欠損値」）、「大学院進学」（進学＝1）、「中学３年の頃の成績」（「１下の方」「２やや下の方」「３真ん中のあたり」「４やや上の方」「５上の方」（「回答したくない」「わからない」「無回答」＝欠損値））

3.4　分析方法

まず「理系／文系」と各宗教変数の単相関関係をクロス集計で確認する。そのうえで各従属変数ごとに以下の多変量解析を行う。まず「宗教属性」は名義尺度であるため多項ロジット分析を用いる。基準カテゴリーは「無宗教」とするため、分析結果では「無宗教」よりも「家の宗教」と回答する傾向、および「無宗教」よりも「個人の宗教」と回答する傾向を算出する。次に「信仰度」は順序尺度であるため順序ロジット分析を用いる。最後に「宗教団体への信頼」は名義尺度であるため多項ロジット分析を用いる。基準カテゴリーは「わからない」とするため、分析結果では「わからない」よりも「信頼」と回答する傾向および「わからない」よりも「ほとんど不信」と回答する傾向が算出される。

また先述した通り、全体サンプルの分析結果とキリスト教と新宗教を除外したサンプルの分析結果を提示する。除外した宗教は以下のとおりである。「本門佛立宗」「大山ねずの命神示教会」「キリスト教」「カトリック」「プロテスタント」「ギリシ

ア正教（日本ハリストス正教会）」「世界救世教」「統一教会（世界基督教統一神霊協会）」「創価学会」「立正佼成会」「霊友会」「仏所護念会」「崇教真光・真光」「天理教」「真如苑」「霊派之光」「生長の家」「御嶽教」。

分析には Stata10 を使用し、欠損値はリストワイズ法で除去する。分析に使用した変数は表 1 にまとめている。

表 1　変数の基本統計量

	全体サンプル（N＝685）		キリスト教・新宗教を除く（N＝647）			
	平均／%	標準偏差	平均／%	標準偏差	最小値	最大値
宗教属性（無宗教（＝ref））	71.1%		75.2%		0	1
家の宗教	20.7%		20.0%		0	1
個人の宗教	8.2%		4.8%		0	1
信仰度（1 ない）	71.5%		75.7%		0	1
2 そんなに熱心ではない	21.1%		19.0%		0	1
3 まあまあ熱心である	5.2%		4.2%		0	1
4 熱心である	2.2%		1.9%		0	1
宗教団体への信頼（わからない（＝ref））	71.0%		73.7%		0	1
信頼している	17.8%		17.5%		0	1
ほとんど不信	11.2%		8.8%		0	1
理系／文系（理系＝1）	30.5%		30.9%		0	1
実年齢	42.682	13.445	42.530	13.497	20	75
性別（女性＝1）	46.6%		46.2%		0	1
市郡規模（町村＝1）	14.2%		14.4%		0	1
婚姻状況（既婚＝ref）	69.1%		68.9%		0	1
離・死別	4.1%		4.0%		0	1
未婚	26.9%		27.0%		0	1
本人現職（専門・管理（＝ref））	29.1%		29.1%		0	1
事務・販売	32.8%		32.9%		0	1
ブルーカラー	11.2%		11.0%		0	1
農林漁業	1.5%		1.5%		0	1
無業	25.4%		25.5%		0	1
世帯年収（350～649 万円（＝ref））	19.9%		18.9%		0	1
0～349 万円	9.9%		9.9%		0	1
650～999 万円	21.6%		21.5%		0	1
1000 万円以上	21.8%		22.6%		0	1
DK・NA	26.9%		27.2%		0	1
父教育年数	12.184	3.305	12.181	3.303	6	18
父職業（父専門・管理（＝ref））	26.0%		25.0%		0	1
父事務・販売	34.6%		35.5%		0	1
父ブルーカラー	27.2%		27.5%		0	1
父農林漁業	7.9%		7.7%		0	1
父無業	1.2%		1.2%		0	1
父不在	3.2%		2.9%		0	1
国公私立（私立（＝ref））	67.7%		68.2%		0	1
国立	17.2%		17.0%		0	1
公立	15.0%		14.8%		0	1
卒業・在学状況（卒業（＝ref））	92.6%		92.9%		0	1
中退	2.6%		2.2%		0	1
在学中	4.8%		4.9%		0	1
大学院進学（進学＝1）	4.8%		5.1%		0	1
中学 3 年の頃の成績	3.832	.966	3.833	.969	1	5

（注）従属変数によって分析時のサンプルが異なるため、多変量解析において最もサンプル数が多くなる「宗教団体への信頼」分析時のサンプル数を用いた基本統計量を掲載している。
（出典）JGSS-2002

4．分析結果

4.1　クロス集計（単相関分析）

「理系／文系」と「宗教属性」・「信仰度」・「宗教団体への信頼」のクロス集計を行った結果を表2～表4にまとめてある。まず各カテゴリーの％を見ると、総体的に理系の方が文系より若干非宗教的である傾向がうかがわれる。たとえば「宗教属性」では「個人の宗教」と「家の宗教」を合わせると理系（28.1％）＜文系（29.1％）（全体サンプル）、「信仰度」では「熱心である」と「まあまあ熱心である」を合わせると理系（4.0％）＜文系（5.90）（キリスト教・新宗教を除いたサンプル）、「宗教団体への信頼」では「信頼」が理系（10.1％）＜文系（11.8％）（全体サンプル）である。しかし、いずれも統計的な有意差はなく、関連度を示すCramer's V も小さいものである。したがって、理系の方が文系より非宗教的であるとしても、その差は誤差程度のごくわずかなものであると言えそうである。

表2　「理系／文系」と「宗教属性」のクロス表

〈全体サンプル〉

	個人の宗教		家の宗教		無宗教		合計	
	%	N	%	N	%	N	%	N
理系	7.6	(16)	20.5	(43)	71.9	(151)	100.0	(210)
文系	8.4	(40)	20.7	(98)	70.9	(336)	100.0	(474)
合計	8.2	(56)	20.6	(141)	71.2	(487)	100.0	(684)

χ^2＝.144　df＝2　n.s Cramer'sV＝.015

〈キリスト教・新宗教を除く〉

	個人の宗教		家の宗教		無宗教		合計	
	%	N	%	N	%	N	%	N
理系	5.0	(10)	19.9	(40)	75.1	(151)	100.0	(201)
文系	4.7	(21)	20.0	(89)	75.3	(336)	100.0	(446)
合計	4.8	(31)	19.9	(129)	75.3	(487)	100.0	(647)

χ^2＝.022　df＝2　n.s Cramer'sV＝.006

表3　「理系／文系」と「信仰度」のクロス表

〈全体サンプル〉

	熱心である		まあまあ熱心である		そんなに熱心でない		無宗教		合計	
	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N
理系	1.0	(2)	4.3	(9)	23.2	(49)	71.6	(151)	100.0	(469)
文系	2.8	(13)	5.5	(26)	20.0	(94)	71.6	(336)	100.0	(211)
合計	2.2	(15)	5.2	(35)	21.0	(143)	71.6	(487)	100.0	(680)

χ^2＝3.357　df＝3　n.s Cramer'sV＝.070

〈キリスト教・新宗教を除く〉

	熱心である		まあまあ熱心である		そんなに熱心でない		無宗教		合計	
	%	N	%	N	%	N	%	N	%	N
理系	.5	(1)	3.5	(7)	21.3	(43)	74.8	(151)	100.0	(202)
文系	1.4	(6)	4.5	(20)	17.9	(79)	76.2	(336)	100.0	(441)
合計	1.1	(7)	4.2	(27)	19.0	(122)	75.7	(487)	100.0	(643)

χ^2＝2.200　df＝3　n.s Cramer'sV＝.059

表４　「理系／文系」と「宗教団体への信頼」のクロス表

〈全体サンプル〉

	信頼		わからない		ほとんど不信		合計	
	％	N	％	N	％	N	％	N
理系	10.1	(21)	16.3	(34)	73.7	(154)	100.0	(209)
文系	11.8	(56)	18.5	(88)	69.8	(332)	100.0	(476)
合計	11.2	(77)	17.8	(122)	71.0	(486)	100.0	(685)

χ^2＝1.100　df＝２　n.s Cramer'sV＝.040

〈キリスト教・新宗教を除く〉

	信頼		わからない		ほとんど不信		合計	
	％	N	％	N	％	N	％	N
理系	8.0	(16)	17.0	(34)	75.0	(150)	100.0	(200)
文系	9.2	(41)	17.7	(79)	73.2	(327)	100.0	(447)
合計	8.8	(57)	17.5	(113)	73.7	(477)	100.0	(647)

χ^2＝.315　df＝２　n.s Cramer'sV＝.022

4.2　多変量解析

以上のクロス集計は「理系／文系」と宗教性の間の単相関を見たものであった。しかし先述した通り、両者の間には様々な要因が絡んでいると思われる。それらの諸要因を統制することで、「理系／文系」と宗教性の関連も、クロス集計の場合とは違った様相を見せるかもしれない。そこで以下では先述した通りの多変量解析の結果を提示する（表５～表７）。

まず表５～表７の「理系／文系」の結果を確認すると、まずすべてのモデルが統計的に有意であり、意味のあるモデルであることがわかる。そしていずれの分析でもオッズ比が１以下であることから、理系は文系に比べて非宗教的である傾向がうかがわれる（理系は信仰度が低い、宗教団体を信頼しない、個人の宗教や家の宗教があると回答しない傾向がある）。しかしながらこの場合も、クロス集計と同様に統計的に有意な関連は確認されなかった。理系／文系による宗教性の違いは、誤差程度の違い、無視できる程度の違いといえそうである。

統制変数は本稿の主たる関心テーマではないが、簡単に確認しておく。まず全体的に有意な傾向が確認できたのが「実年齢」である。年齢の高い回答者ほど宗教的な傾向にあり、これは全体サンプルにおいてもキリスト教・新宗教を除いたサンプルでも同じである。ただし「宗教団体への信頼」については、年齢の高い人は「わからない」よりも「信頼」と回答する有意な傾向が見られたが、「わからない」に比べて「ほとんど不信」と回答する有意な傾向は確認されなかった。

次に「本人現職」も有意な結果を示したものが多い。結果はやや変則的だが、おおよその傾向としては「専門・管理」がそれ以外の職業に比べて優意に宗教的な傾向が見られる（特に「専門・管理」と「事務・販売」の間）。ただしキリスト教・新宗教を除いたサンプルでは有意な関連を示したものはないため、「本人現職」と宗教性の間の関連は、キリスト教信者や新宗教信者であることと関連している可能性がある。

「性別」は「宗教団体への信頼」についてのみ有意な傾向が確認される。すなわち女性の方が、「わからない」よりも「ほとんど不信」と回答する有意な傾向が確認される。

「父職業」もいくつか有意な結果が確認される。全体サンプルの「宗教属性」において父親の職業が専門・管理の人の方が、父親が他の職業の人よりも個人の宗教があると回答する傾向がある。また全体サンプルの「宗教団体への信頼」については、父親が事務・販売職の人は、父親が専門・管理職の人に比べて「わからない」よりも「ほとんど不信」と回答する有意な傾向がある。

「世帯年収」については全体サンプルの「宗教属性」において「350～649万円」に比べて「650～999万円」「1000万円以上」「DK・NA」の回答者が、「個人の宗教」と回答しない傾向にある。

表5　「宗教属性」を従属変数とする多項ロジット分析（数値はオッズ比、基準は「無宗教」）

	全体		キリスト教・新宗教を除く	
	個人の宗教	家の宗教	個人の宗教	家の宗教
〈独立変数〉				
理系／文系（理系＝1）	.722	.812	.799	.842
〈統制変数〉				
実年齢	1.057***	1.041***	1.054*	1.045***
性別（女性＝1）	1.312	.855	.789	.871
市郡規模（町村＝1）	.753	1.139	.958	1.219
婚姻状況（既婚＝ref）				
離・死別	1.720	1.568	2.438	1.680
未婚	1.838	1.294	1.597	1.441
本人現職（専門・管理＝ref）				
事務・販売	.571	.568*	.434	.576
ブルーカラー	1.466	.806	1.125	.867
農林漁業	.000	.596	.000	.682
無業	.389*	.772	.430	.797
世帯年収（350～649万円＝ref）				
0～349万円	.567	1.379	.584	1.415
650～999万円	.741*	.858	1.782	.760
1000万円以上	.363*	.943	.789	1.051
DK・NA	.338*	.883	.536	.878
父教育年数	.966	.994	.928	1.003
父職業（専門・管理＝ref）				
父事務・販売	.391*	1.214	.812	1.300
父ブルーカラー	.638	1.237	1.214	1.317
父農林漁業	.447	.891	.346	.929
父無業	2.486	1.225	5.895	1.330
父不在	.748	1.828	.693	1.681
国公私立（私立＝ref）				
国立	1.796	1.175	1.190	1.269
公立	.927	1.295	.764	1.212
卒業・在学状況（卒業＝ref）	1.000	1.000		
中退	4.564*	.629	1.018	.656
在学中	1.242	.989	1.808	.829
大学院進学（進学＝1）	.969	.817	1.489	.903
中学3年の頃の成績	.901	.976	1.022	.954
LR	87.446**		76.134*	
NagelkerkeR^2	.153		.149	
N	684		647	

（注）***p＜.001　**p＜.01　*p＜.05
（出典）JGSS-2002

学校の状況などについては、ほとんど有意な関連が確認できなかった。有意な関連が確認できたのは、まず全体サンプルの「宗教属性」について、「卒業」者に比べて「中退」者が「個人の宗教」と回答する有意な傾向がある。またキリスト教・新宗教を除いたサンプルの「宗教団体への信頼」について「中学3年の頃の成績」が良かったと答えた回答者は、「わからない」よりも「信頼」と答える有意な傾向がある。

5．要約と議論

本稿では理系出身者は文系出身者に比べて非宗教的なのかをJGSS-2002という全国データを用いて検討することにあった。まずクロス集計では、理系の方が若干非宗教的に見える部分もあったが、統計的な有意差は確認できなかった。諸変数を統制した多変量回帰分析においても、理系の方が非宗教的な傾向が見受けられたが統計的に有意な関連ではなかった。理系出身者は文系出身者と比べ

表 6　「信仰度」を従属変数とする順序ロジット分析（数値はオッズ比）

	全体	キリスト教・新宗教を除く
〈独立変数〉		
理系／文系（理系＝1）	.805	.875
〈統制変数〉		
実年齢	1.049***	1.052***
性別（女性＝1）	1.106	.969
市郡規模（町村＝1）	.967	1.046
婚姻状況（既婚＝ref）		
離・死別	1.381	1.536
未婚	1.289	1.289
本人現職（専門・管理＝ref）		
事務・販売	.552*	.495*
ブルーカラー	.961	.874
農林漁業	.323	.503
無業	.608	.652
世帯年収（350～649 万円＝ref）		
0～349 万円	1.299	1.627
650～999 万円	.816	.989
1000 万円以上	.750	1.063
DK・NA	.752	.893
父教育年数	.977	.981
父職業（専門・管理＝ref）		
父事務・販売	.911	1.296
父ブルーカラー	1.028	1.356
父農林漁業	.829	.866
父無業	2.064	3.113
父不在	1.563	1.592
国公私立（私立＝ref）		
国立	1.298	1.113
公立	1.091	.969
卒業・在学状況（卒業＝ref）		
中退	1.923	.780
在学中	1.158	1.118
大学院進学（進学＝1）	.838	1.040
中学 3 年の頃の成績	.946	.957
LR	67.563***	67.198***
NagelkerkeR^2	.118	.131
N	684	643

（注）***p＜.001　**p＜.01　*p＜.05
（出典）JGSS-2002

て非宗教的であるというのは、誤差程度の違いであると思われる。

一方、「理系／文系」以外の統制変数の方が宗教関連変数に対して統計的に有意な影響力をもっているようである。結果は変則的であるが、主な傾向は以下の通りである。まずほぼ全てのモデルとサンプルにおいて年齢の高い人ほど宗教的な傾向がある。また本人の現職については、特に全体サンプルにおいて専門・管理職従事者に宗教的な傾向が確認される。「性別」「世帯年収」「卒業•在学状況」「中学 3 年の頃の成績」の影響力は統計的に有意な影響力が見られる場合もあるが、宗教変数やサンプルによって結果は変則的である。

本稿の問いは「理系出身者は文系出身者に比べて非宗教的であるというのは本当なのだろうか？」であり、この問いに全国データの計量分析で答えることが課題であった。問いに対する本稿の答えは「理系出身者が非宗教的であるというわけではなく、逆に文系出身者が宗教的であるというわけでもない。むしろ理系か文系かという区分

表7　「宗教団体への信頼」を従属変数とする多項ロジット分析
（数値はオッズ比、基準は「わからない」）

	全体		キリスト教・新宗教を除く	
	信頼	ほとんど不信	信頼	ほとんど不信
〈独立変数〉				
理系／文系（理系＝1）	.531	.848	.503	.783
〈統制変数〉				
実年齢	1.036*	.981	1.037*	.981
性別（女性＝1）	.620	.546*	.597	.588*
市郡規模（町村＝1）	1.250	1.369	1.056	1.316
婚姻状況（既婚＝ref）				
離・死別	.458	.633	.445	.685
未婚	.502	.602	.497	.613
本人現職（専門・管理＝ref）				
事務・販売	.394*	.529*	.444	.554
ブルーカラー	.796	.628	.849	.659
農林漁業	.430	1.145	.808	1.135
無業	.375*	.719	.348	.711
世帯年収（350～649万円＝ref）				
0～349万円	.544	.969	.467	.829
650～999万円	1.962	1.656	1.903	1.457
1000万円以上	.405	1.171	.454	1.055
DK・NA	.638	.792	.799	.752
父教育年数	.952	.982	.941	.980
父職業（専門・管理＝ref）				
父事務・販売	1.150	1.841*	1.200	1.505
父ブルーカラー	1.770	1.243	2.091	1.095
父農林漁業	1.895	1.155	1.568	1.038
父無業	.563	.440	.760	.381
父不在	1.712	2.325	.517	1.941
国公私立（私立＝ref）				
国立	1.761	1.130	1.441	1.045
公立	.719	1.004	.654	1.087
卒業・在学状況（卒業＝ref）				
中退	1.221	.536	1.118	.508
在学中	.000	2.106	.000	1.944
大学院進学（進学＝1）	.121	.462	.154	.476
中学3年の頃の成績	1.358	1.199	1.477*	1.230
LR	107.423***		83.870**	
NagelkerkeR^2	.182		.157	
N	685		647	

（注）***p＜.001　**p＜.01　*p＜.05
（出典）JGSS-2002

自体が宗教性とはほとんど無関係である可能性が高い」というものである。

この結果は「自然科学を学ぶ者は宗教に関心をもたないのではないか、という前提は、捨てなければならないということである。これはむしろ思い込みに近い」（井上・他編 1995：24）という指摘がひとまず妥当であることを示唆するとともに、人文・社会科学を学ぶ者は宗教に関心をもつのではないか、という前提も思い込みに近いのかもしれないことも示唆する。

となれば「理系の人がなぜ宗教に夢中になるのか」「理系の人だから（カルト的）宗教に入るはずがない」という疑問や認識自体が、実態から離れた「中に浮いた実感」なのかもしれない。理系出身であれ、文系出身であれ、宗教に対する関心や宗教性の高さ（あるいは無関心や低さ）の程度はほとんど同じといっていいかもしれない。

ただし一点補足しておかなければならないのは、

本人現職と宗教性との関連である。結果はやや変則的だったが「専門・管理」が他職業より宗教的な傾向が確認された。この分類の専門職の中に理系出身者の多い職業、理系学部で習得した技能が求められる職業が含まれている。該当するのは以下の職業である、「自然科学系研究者」「人文科学系研究者」「機械・電気・化学技術者」「建築・土木技術者」「農林技術者」「情報処理技術者」「その他の技師・技術者」「医師」「歯科医師」「薬剤師」「助産師（助産婦）」「保健師（保健婦）」「栄養士」「看護師(看護婦、看護士)」「その他の保健医療従事者」「獣医師」。

専門職の中のこれら理系職の存在が「専門・管理」の宗教性が相対的に高い傾向を示した結果につながっている可能性がある。大学における専攻の違いよりも、むしろ職種における「理系的職業」と「文系的職業」のという違いが宗教性と関連するのかもしれない（例えば、技術志向職と対人志向職の違い)。ただし専門職は職業威信も高いため(高階層)、高階層者の宗教性が高いという結果である可能性も否定できず、今後の検討課題である。

本稿の限界と課題は以下の通りである。第1に宗教関連変数が少ない。JGSS は総合的調査であり、宗教に関する設問が限られている。今後は、豊富な宗教関連変数を設けたデータの分析が必要だろう。

第2に宗教関連変数について、各回答のケース数が少ないものが多い傾向にある。ケース数が少ない場合、統計的に有意な結果が出にくい傾向がある。今後の JGSS で理系と文系に関する設問が含まれた場合は、JGSS-2002 と合体させてケース数を増やした上での分析を行ってみる必要がある。

第3に職業の効果について再検討する必要がある。専門職を「理系的専門職」と「文系的専門職」に分けて宗教性を比較する、あるいは全ての職業を一括した上で、技術志向職と対人志向職に分けて比較するなどの分析が必要である。特に専門職のカテゴリーをさらに細分化すると JGSS-2002 のみでは各カテゴリーに含まれるケース数が少なくなる。しかし職業および本稿で使用した宗教関連変数は、約 10 年分のすべての JGSS に含まれているため、それらのデータを合体させて分析することが可能である。

第4に本稿の分析結果を日本に特徴的な結果であるという場合、他地域との比較が不可欠である。たとえば日本と同様に非キリスト教文化圏・非欧米地域に属する台湾との比較である。実際、台湾については、台湾の代表的な社会調査である「台湾社会変遷基本調査」（Taiwan Social Change Survey、TSCS）の 2004 年に行われた宗教モジュールに、高等教育における専攻を尋ねていることが確認済みであり（章•傳編 2005)、今後の分析課題である。

これらの限界と課題がありつつも本稿には以下の意義があると思われる。第1に「理系は非宗教的である」という社会通念を、限定的ではありながらも、代表性の高いデータから反証することができた。この知見は、日本における宗教と科学(自然科学）の関連についてのイメージに再考を促すものである。

第2に日本という非欧米・非キリスト教社会における「学問分野と宗教」の関連の一端を示すことができた。これは従来ほとんどアメリカのみで行われてきた先行研究の空白部分を埋めるものである。

第3に副次的結果として宗教性と職業の関連に着目する必要性があることを示した。社会階層研究では、職業と人々の価値観や社会的態度の関係が長らく分析されてきたが、職業と宗教性の関連はほとんど論じられていない。本稿の知見は、宗教性についても職業の影響力を検討する必要性があることを示唆している。

宗教と科学（特に自然科学）というテーマは、ガリレオの宗教裁判以来の重要なテーマである。現代でもアメリカなどでは進化論と創造説の是非をめぐって世論が割れるなど、宗教と科学をめぐる議論は尽きない。日本ではキリスト教文化圏のような世界観／宇宙観をめぐる宗教と科学の対立はほとんど目立たない。しかしながら、近代医学に基づいた薬物療法などを否定して信仰療法や民間療法、宗教とも関連の深い代替療法を奨励するような主張（内海 2013）が、特に慢性疾患や精神疾患の治療法に関してしばしば見受けられるなど(岩波 2007；加藤 2009；NATRON 2014)、宗教と科学をめぐる対立と決して無縁な社会というわけではない。今後も引き続き分析を進めていきたいと考えている。

謝辞

データの分析にあたり、東京大学社会科学研究

所付属日本社会研究情報センターSSJデータアーカイブから、データセットの提供を受けた。日本版General Social Surveys（JGSS）は、大阪商業大学比較地域研究所が、文部科学省から学術フロンティア推進拠点としての指定を受けて（1999-2003年度）、東京大学社会科学研究所と共同で実施している研究プロジェクトである（研究代表：谷岡一郎•仁田道夫、代表幹事：佐藤博樹•岩井紀子、事務局長：大澤美苗）。東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターがデータの作成と配布を行っている。

本稿は日本宗教学会第73回学術大会（2014年9月13日、同志社大学今出川キャンパス）における筆者の口頭発表「理系は非宗教的か？──JGSS-2002の分析──」に基づいている。

また本稿は日本学術振興会科学研究費（若手研究B）「台湾における宗教と利他主義に関する社会学的研究」（研究代表者：寺沢重法）および日本学術振興会科学研究費（基盤研究B）「東アジアにおける宗教多元化と宗教政策の比較社会学的研究」（研究代表者：櫻井義秀）の一貫として行われたものである。

注

1）一方で，研究者ではなく大学生においては，「宗教の側，科学の側どちらに立つか？」と質問された場合，教育学や経営学などを専攻する学生は，「宗教の側に立つ」と答える傾向にあることも指摘されている（Scheitle 2011）.

2）なおアメリカでは宗教性が自然科学に対する人々の態度や知識に与える影響を検証した研究も行われているため，若干付言する．

Ellison and Musick（1995）はアメリカの代表的な社会調査General Social Suvery（GSS）の1998年版調査データを用いて，保守的プロテスタンティズムに特徴的な宗教性と自然科学に対する態度との関連性を分析している．結果，社会―人口学的変数を統制した上でも１）聖書の無謬性を信じること，２）保守的プロテスタンティズムの神学的正当性を信じること，３）罪が人間に偏在していると信じること，という保守的プロテスタンティズムに特徴的な3つの宗教性の高さが，自然科学に対する道徳的批判（「自然科学は人々の道徳や信仰をおろそかにする」など）と有意に結びついているという結果である．さらにこれらの宗教性以外に，保守的プロテスタント教派に所属する人は自然科学に対する批判的な態度を持つ傾向があることを明らかにしている．

またSherkat（2011）は，GSSの2006年版調査データを用いて，セクト的プロテスタント教派信者，カトリック信者，ファンダメンタリスト的宗教的信念をもつ人々は，そうでない人々に比べて，社会―人口学的変数を統制した上でも科学的リテラシーが低い傾向にあることを明らかにしている．

3）近年刊行された一般書としては岡崎（2013）が挙げられる．これは宗教史・思想史的な観点からキリスト教と科学の関係史を解説したものである．

参考文献

安斎育郎•村尾美明（2001）「人はなぜ騙されるのか──理系学生がなぜオカルトに惹かれてしまったか──2000年度物理教育研究大会講演」『物理教育』49(1)：5-10.

Brown, C.M. (2003) “The Conflict between Religion and Science in Light of the Patterns of Religious Belief among Scientists.” *Zygon: Journal of Religion and Scientce* 38(3): 603-632.

章英華•傳仰止編（2005）『台灣社會變遷基本調查計畫第四期第五次調查計畫執行報告』台北，中央研究院社會學研究所.

Ecklund, E.H. and J.Z. Park (2009) “Predicting Conflict Between Religion and Science Among Academic Scientists.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 48: 276-292.

Ecklund, E.H., J.Z. Park and P.T. Veliz (2008) “Secularization and Religious Change Among Elite Scientists: A Cross-Cohort Comparison.” *Social Forces* 86: 1805-1840.

Ecklund, E.H. and C. Scheitle (2007) “Religion Among Academic Scientists: Distinctions, Disciplines, and Demographics.” *Social Problems* 54: 289-307.

Ellison, C.G. and M. Musick (1995) “Conservative Protestantism and Public Opinion Toward Science.” *Review of Religious Research* 36: 245-262.

Evans, J.H. and M.S. Evans (2008) “Religion and Science: Beyond the Epistemological Conflict Narrative.” *Annual Review of Sociology* 34: 87-105

Faia, M.A. (1976) “Secularization and Scholarship Among American Professors.” *Sociological Analysis* 37: 63-73.

Gross, N. and S. Simmons (2007) *How Religious Are America's College and University Professors?* New York, Social Science Research

Council.
────(2009) “The Religiosity of American College and University Professors.” *Sociology of Religion* 70, 101-129.
岩波明(2007)『うつ病 ── まだ語られていない真実 ──』筑摩書房.
井上順孝・武田道生・北畠清泰編（1995）『オウム真理教とは何か ── 現代社会に問いかけるもの ──』朝日新聞社.
Johnson, D. (1997) “Formal Education vs. Religious Soliciting New Evidence with Multinominal Logit Modelling.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 36: 231-246.
加藤忠史(2009)『双極性障害 ── 躁うつ病への対処と治療 ──』筑摩書房.
Larson, E.J. and L. Witham (1997) “Scientists are Still Keeping the Faith.” *Nature* 386: 435-436.
────(1998) “Leading Scientists Still Reject God.” *Nature* 394: 313.
Lehman, E.C.Jr. (1974) “Academic Discipline and Faculty Religiosity in Secular and Church-Related Colledges.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 13(2): 205-220.
Lehman, E.C.Jr. and D.W. Shriver Jr. (1968) “Academic Discipline as Predictiveof Faculty Religiosity.” *Social Forces* 47: 171-82.
Lemert, C. (1979) “Science, Religion and Secularization.” *Sociological Quarterly* 20: 445-461.
Leuba, J.H. (1912) *The Psychological Study of Religion: Its Origin, Function, and Future*, New York: Macmillan.
────(1916) *The Belief in God and Immortality*. Boston,MA: Sherman, French.
────(1934) “Religious Beliefs of American Scientists.” *Harpar's Magazine* 169: 291-300.
Lindholm, J. and H. Astin (2006) “Understandinf the ‘Interior’ Life of Faculty: How Important is Spirituality?” *Religion & Education* 33: 64-90.
NATRON(2014)『「ニセ医学」に騙されないために ── 危険な反医療論や治療法，健康法から身を守る！──』メタモル出版.
三谷はるよ(2014)「日本人の宗教性とボランティア行動 ── 非教団所属者における拡散的宗教性の影響 ──」『ソシオロジ』179：3-18.
水野博介・辻大介(1996)「大学生における宗教意識・オカルト関心と情報行動 ── 理系・文系学生における調査結果の比較 ──」『埼玉大学紀要』32(1)：1-22.
岡崎勝世（2013）『科学 vs. キリスト教 ── 世界史の転換 ──』講談社.
櫻井義秀（2006）『「カルト」を問い直す ── 信教の自由というリスク ──』中央公論新社.
────(2009)『霊と金 ── スピリチュアル・ビジネスの構造 ──』新潮社.
Sakurai, Y. and S. Terazawa (2012) “Is Religion Social Capital in Japan?” *Journal of the Graduate School of Letters* 7: 21-29.
Sherkat, D.E. (2011) “Religion and Scientific Literacy in the United States.” *Social Science Quarterly* 92(5): 1134-1150.
Stark, R. (2003) *For the Glory of God: How Monotheism Led to Reformations, Science, Witch-Hunts, and the End of Slavery*. Princeton: Princeton University Press.
Stark, R. and R. Finke (2000) *Acts of Faith: Explaining the Human Side of Religion*, Berkeley: University of California Press.
Scheitle, C.P. (2011) “U.S. College Students' Perception of Religion and Science: Conflict, Collaboration, or Independence?: A Research Note.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 50(1): 175-186.
Thalheimer, F. (1973) “Religiosity and Secularization in Academic Professions.” *Sociology of Education* 46(2): 183-202.
内海聡（2013）『医学不要論』三五館.
鵜浦裕(1998)『進化論を拒む人々 ── 現代カリフォルニアの創造論運動 ──』勁草書房.
Vaughn, Ted R., Douglas H. Smith and Gideon Sjoberg (1966) “The Religious Orientations of American Natural Scientists.” *Social Forces* 44(4): 519-526.
武田徹（2011）「理系エリートと宗教」『WEBRONZA』(2011年11月25日)(http://astand.asahi.com/magazine/wrnational/2011112400014.html　2014年10月30日取得).
Wuthnow, R. (1985) “Science and the Sacred.” In *The Sacred in a Secular Age: Toward Revision in the Scientific Study of Religion*, edited by P.E. Hammond, 187-203. Berkley: University of California Press.